

科学技術者としての獣医師のありようその36

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者	中村, 寛
巻/号	29巻7号
掲載ページ	p. 414-415
発行年月	1976年7月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



み、お茶を飲みながら美術評論に花が咲いたり、来客からも好評を博している。

これらの画伯とは、梶原防疫課長(油絵)、田端指導係長(油絵)、大崎養豚養鶏係長(書)の3名。今所内に展示している作品も、10年後には、高値を呼び、われわれ庶民は、とても手が出ない高嶺の花になるだろうとのうわさ、そこで、気の早い所員から、月2回の取替え時には即売会を開催したらとの要望がでる始末。ある女人筋から、これほどの腕ならば、「塾」をひらいては、との話もあったとか、なかったとか。

(情報連絡担当者 清野広之報)

熊本県獣だより

県獣総会——功労者表彰・顧問推薦

熊本県獣医師会(森 啓次会長)の総会は、さる5月24日(月)熊本市・鶴屋デパートを会場に開催されたが、席上功労者表彰、顧問の推薦、県獣政連規約の改正等が行なわれた。

功労者表彰：佐藤東衛(前県獣会長) 白石又夫(前県獣理事)

顧問推薦：佐藤東衛(前県獣会長) 市原鶴雄(前県獣副会長・化血理理事) 山部竜三(県議・阿蘇畜協組合長)

県獣政連役員：(委員長) 森 啓次 (副委員長) 市原 強 (兼会計責任者) 西村安信

会 報

<論 説> 科学技術者としての獣医師のありよう (その36)

36. 主張する科学技術者に

かつて科学者は黙々と研究室で研究し、実験室で実験に没入し、文献を読み、めまぐるしい世情をよそにひたすらわが道を歩む姿が尊いとされた時代が続いた。そして勉強に熱中のあまり日露戦争を知らなかったという学者の逸話が一種の美談として伝えられた。事ほどさように昔から科学者は一風変わった存在として世にあるのを別に不思議とも思われない風潮があった。これは洋の東西を問わず共通の概念でもあった。これには理由がある。一般に科学者は世の中の進歩発展の先駆者として重要視されるとともに、いっぽうでは平和な世のいとなみの秩序を破壊する者として常に為政者から恐れられ、警戒され、監視されていたのである。これは歴史をひもとけば歴然としている。己が実験と思考から従来の常識に反旗をひるがえしたり否定した科学者はどうなったか、ある者は断頭台に立たされ、ある者は幽閉され、ある者はひそかに消されたのである。従って現代の科学文明の成果はある意味ではこれら先駆の科学者の血の代償であるともいえるのである。このような歴史的事実が勢い科学者をして黙々と実験室に、研究室にとじこもらせることになったのかも知れない。沈黙こそ科学者の美德とする哀しい生活の知恵になったのであろう。この「物言わぬ科学者」の歴史的必然性をここで私達は歴史の流れとともにはっきりと認識しなければならない。何故なら問題提起は明確な現状認識から出発するからである。このような科学者の独立性の不確立がいかに世の中の真実を誤らせ、世の進歩を遅らせたかを知った西欧の人々は漸く学

日本獣医師会会長 中 村 寛

問の独立性と自由の尊厳を悟ったのである。明治になって西欧文物の輸入に急であったわが国もいち早く、この思想と型態をとり入れ、大学における学問の自主独立を強く表面に打ち出したことは既にご承知の通りである。然し建前はそうであっても学問は川辺の葦のごとく時の権力の風向きによって常にゆらいでいたのである。このことは敗戦を機として、はじめて人間性の回復が確立され、それとともに言論の自由、学問の自主独立が再確認され人々は自由を謳歌し学問の自主独立を高らかにうたいあげたのである。既に私が日本獣医師会雑誌の論説に引用した野間 宏氏の「人類は生物の掟を破るか」の文中に「……日本の科学の社会的特殊性は、遺伝工学についての分子生物学者からの取り組みの弱さにも見られる……」と指摘している。さらに慶大 渡辺教授も日本の特殊問題として「科学を社会の中にはっきり入れこむことと、それを規制する方向と、両方を一様にやらなければいけない」とし、「……日本における第一線の科学者は前面に出てこない。アメリカでは現役の分子生物学者は多くの批判にさらされつつ、研究停止・安全な研究の指針立案・研究再開のための方法論の確立という実践をくりぬけてきた。この種の実践のないところでは専門家の公開討論によってしか、一般市民の監視を実現する条件が成立しない。この点は原発のような焦眉の問題になると、明らかな弱点として露呈してくる。原子力委と反対運動にはさまれて、学術会議の腰が定まらないことに象徴的にあらわれているが、一般の研究者にとっては、へたに発言すれば研究費にさしさわりがくるといふ現実認識がある。だからアメリカやフランスなどに見られるよ

うな、科学者の強力な原発反対声明は日本では出てこない。日和見なのである。つまり日本では、科学者の人間としての生きざま、その文明的な根源と、科学者としての実践とが、はなればなれになって、建前と本音の分離がある。(中略)日本の科学者はその社会的基盤を欧米のそれにまかせ切り、科学を自分の「好み」と「世渡りの道具」にしているだけである。……」(読売新聞, 51. 5. 17) また柴谷篤弘氏は鋭く次のように指摘している。「……昨今の多くの科学者は学問を自分の好みと世渡りの道具にしている。このことは科学のあらゆる分野にわたっている。このことがいかに世の中を毒しているかは各位すでにご承知の通りである。そして水銀中毒事件に見られるように企業そのものを危機におとし入れているのである。これらはすべて科学者がその科学者としての倫理と哲学の欠如に基因し、また、一面自己の学んだ学問と社会の係わりあいについての盲目的な科学者の社会性にある。そして学問に基づく強い良心からの自己主張の欠如によってその危機的条件と状況は完結するのである。」とここで世の中はそうばかりではない。東大講師高橋正氏に代表される薬害告発は根強く続けられているし、医学会も漸く動き出したのである。「仙台市で開かれている第79回日本小児科学会(会頭荒川雅男東北大学教授)は、15日午後3時すぎから、市民会館で開いた総会で「大量注射による大腿四頭筋短縮症を防げなかったことを反省し、今後、大量注射によるこうした被害を出さないよう、最大の努力を払う」という理事会声明を発表し

た。」と、読売新聞は5月16日付けで大きく報道している。これは会場前列に陣取っていた約20人の若手会員が、つぎつぎに立ち「昨年の総会后、理事会は筋肉短縮症委員会を設け、十分に討議してきたはずだ。また、問題をウヤムヤに終わらせることは許されない」、「理事会声明を出せ」と追及した。このことが直接の動機だとも報道しているが、それは一つには医学者なり、医学研究者の良心的活動そのものが活発になってきた証左であり私は深く敬意を表したい。

世間では往々にして内輪の恥は外に出すのが同族意識がある。このことはそれなりに意義のあることであるが、学問の世界は全く別である。学問とはまさに公開の原則だからである。学問に公開の原則が破られたときこそ、それは暗黒の世界であることを深く心に刻みこまなければならない。

想いをここにいたし、改めてわが獣医業界を眺めるとき、私はあまりにも自己反省・自己主張の少ないのに驚くのである。問題がないのでは決してない。世人注目的であった石油蛋白の飼料化問題についても、遂に獣医学界としての意見の発表はなかったし、ムレ肉についても沈黙である。また、最近市販化されるようになったロングライフミルクについても獣医・畜産業界には意見が出てこない。われわれ獣医科学者は、主張しなければならない問題には、いつでもこれに対応して堂々と自己の意見が発表できる科学技術者でありたい。各位の自省と奮起を待望する次第である。(つづく)

中村会長 農林関係報道陣と記者会見 記念大会開催にあたり、諸問題を語る(6月18日)

獣医師法制定50周年記念全国獣医師大会の、この意義ある行事の催しにあたり、さる6月18日、本会の中村会長が、とくに農林関係報道記者と、農林省記者室において、記者会見を行なった。



記者会見で説明される中村会長(左)
(農林記者会室にて)

同日午後2時より、農林省内の農政記者クラブ(一般関係紙)において、また、午後2時30分より農林記者会(業界関係紙)において、それぞれ記者会見を行ない、獣医師法制定50周年記念全国獣医師大会開催および、獣医師を囲む諸問題等について、その意義を強調して語られた。

事務担当者会議開催(6月21日)

中央と地方との事務連絡の円滑化をはかり、獣医師会活動の推進をさらにはかるため、毎年行なわれている全国獣医師会事務担当者会議は、今年は、獣医師法制定50周年記念全国獣医師大会の開催前日の6月21日午前10時より、東京・南青山会館を会場に開催された。

日程：開会・地方会事務担当者・日獣職員の見聞 全国獣医師大会開催について 事務連絡一事務局長 会館建設企画室長 総務部 経理部 獣医業務部 学術情報部 獣医師政治連盟 海外担当一地方会事務担当者の要望、事務連絡、質疑応答、閉会

冒頭、中村会長より挨拶があり、日頃の業務に精励されて、これが獣医師活動、中央・地方の連繫協調をはかれる原動力として活躍されていることに対し、深甚な